

絵本の中のひとつの出会いから保育的なつながりを考える

—授業での『くまのアーネストおじさん』の読み合いから

菊 地 知 子

1. 問題の所在

- 1) 絵本を通して保育の知を深める可能性の模索
- 2) 教職課程授業をフィールドとした当研究の概要と方法

2. 絵本の読み合い授業実践の実際

- 1) 絵本『くまのアーネストおじさん』シリーズの授業への導入
- 2) 絵本の詳細の描き直し

3. 絵本の読み合い授業実践の考察

- 1) 第一週授業の振り返りと考察
- 2) 第二週授業の振り返りと考察
- 3) 血縁や教育的関係に特化されない保育的なつながりを見いだす

4. 小括

1. 問題の所在

1) 絵本を通して保育の知を深める可能性の模索

人は血縁を超え男性女性の別を超え、次代に子孫を残す、という営みを営々と続けてきた。人の歴史をそのように概観することは、必ずしも奇をてらってはいまい。どの時代のどの文化、どの社会も、例外なく次代を育ててきた。

絵本『くまのアーネストおじさん』シリーズ¹に登場するアーネストは、「おじさん」の邦訳が語る通り、成人男性であり、作中クマの姿でわたしたちの前に現れる。アーネストは公共の広場（公園）で掃除夫をしていたときに、公園のごみ箱で、目も開いていない赤ん坊だったセレスティーンを見つけて家に連れて帰り、世話を始める。

人は確かに、性別や職業的か否かを問いすぎることなく、人を育てる仕事、すなわち保育と呼ばれうる営みを続け、生殖によって自分自身やパートナーが産んだ子どもに限定することなく、むしろ非血縁の子どもたちの育ちに多分に多様にかかわってきているはずである。その文脈において、ゴミ箱に捨てられた赤ん坊に「偶然に」出会い、その小さいのちが今ここで絶えてしまわぬよう守ることを自らが引き受けたアーネストの仕業は、時代を超え文化社会の差異を超えた人間業と言いうるのではないか。

絵本に登場する人物は、それが動物の姿をしている場合であれ、読み手と断絶した存在、相対化しえない存在として描かれているのではない。その姿に、読み手との連続性や共通性を見る、という仮定で描かれているはずである。すなわち、登場人物は読み手によってその行為を理解され得、心情に共感されうるものが、暗黙裡に前提とされていると考える。絵本の中に文字通り「描かれた」人物たちは、描かれたこ

とにより生命性を得て生きているかのごとくに読み手であるわたしたちに表れ、生き生きと生きる「人物」さながらの姿をわたしたちに呈する。わたしたちは、その生を、自らも生きるがごとく、あるいは近い者が生きる生を近い思いで分かち持つがごとく、読み手として「作品を生きる」。

また、「くまのアーネストおじさん」が絵本の中で生き生きと生きるのはまさに「日常」と呼ぶにふさわしい毎日である。そして、保育において今日語られるべきことの、唯一ではないにせよ重要なひとつの要素として、保育の日常性、あるいは日常性の持つダイナミズム、ということが挙げられよう。ここでいう保育とは、子育ても含めて称されるところの、人の育ちを保とうとし、またその同行者になろうとする営みのことである。日常性はややもすると保育の理論化の枠外にあり続けている観があるが、日常性を離れずに保育が語られ研究される必要性への指摘もあるⁱⁱ。

さらには、保育のその日常性を支えるものが必ずしも血縁的關係に閉ざされてはいないことは、人が人を育て人が人として育ってきた人間の歴史を改めて紐解くまでもなく、自明のことと言い得よう。同時に、家庭においても保育園や幼稚園といった保育施設においても、人の育ちに男性がかかわることもまた、とりたてて新しいことではない。昨今、「イクメン」なる呼称を自らに与えⁱⁱⁱ、まめまめしく甲斐甲斐しく我が子の子育ての当事者、担い手となる男性諸氏の登場をみた。子育てを楽しむ自ら成長するというコンセプトに異論はない。また、人が人を育てる、人が人の中で育つ、ということを経時代的人類の命題として現代社会に投げかけ、時代のライフスタイル、労働のあり方を考えるための大きな役割を果たす可能性を感じもする。一方で、両親と子どもからなる家族像の固定化や、母子関係、父子関係、親子関係といった個と個の関係性に閉じられ社会全体からは分離されるような「わずかに拡大した個」の強化につながりかねないとの懸念も生じる。個の強化は、強化されにくい個、小さく弱い存在にさらなる辛苦を与えかねないことを、わたしたちの社会は近過去に経験済みであろう。しかし「イクメン」やそれに纏わる現象についての論考は別の機会を待ち、ここでこれ以上論じることは差し控えたい。

いずれにせよ、人は、性別や、職業的か否かを問い過ぎることなく、人を育てる仕事、すなわち保育と呼ばれうる営みを続けてきたことを確認しておきたい。

当該授業は、アーネストとセレスティーナの人と人とのつながりのあり方を通して、学生の既得の家族像、親子像、教師—児童生徒といった大人と子どものつながりのあり方を問い直そうとする試みであった。すなわち、大人子どものつながりは、「このようでもありうる」ということを見出し実感しうる授業として展開したいと考えた。

2) 教職課程授業をフィールドとした当研究の概要と方法

筆者が担当している2つの授業においてそれぞれ2週連続で絵本の読み合いをし、授業の終わりに振り返りのコメントを書いて提出。一週目の記述内容は、「ふたりの暮らしぶりについて察せられること」および「ふたりの関係（つながり）」の2点。二週目は、「おいたち」について知って改めて感じたことを記述した。

授業を行った2つの授業とは、

- ・「表現教育論」

(N女子大学教育学科2年生対象教職必修課目 履修者64名)

・「保育表現 I (指導法)」

(O女子大学希望者対象教職課目 履修者16名)

である。

(1週目=2010年5月第2週 の授業内容)

「くまのアーネストおじさん」シリーズのうち、「セレスティーヌのおいたち」以外の、日々のエピソードを綴った絵本の中をランダムに配布し、席の近い者2名から4名のグループで1グループあたり3～6冊ずつ読み合う。基本的に、自分で読むのではなく人と読む(人に読んでもらう、人に読み語る)体験とする。その後、①ふたりの暮らしぶりについて、および②二人の関係性について、それぞれわかること察せられることを提出用紙に各自記入。

(2週目=2010年5月第3週 の授業内容)

前回の提出用紙に書かれたことを項目ごとにまとめ、アーネストとセレスティーヌについて、どのような推察がなされたかを確認していく。さらに、アーネストの手記の形で書かれた、絵画集のような「セレスティーヌアーネストとの出会い」を、パソコン内のスキャン画像を投影して全ページを全員で教員の読み語りと共に観ていき、絵本「セレスティーヌのおいたち」も教員が絵本を見せつつ読み語る。改めてこの二人のことで感じたことや考えたことを提出用紙に記入する。

2. 絵本の読み合い授業実践の実際

1) 絵本『くまのアーネストおじさん』シリーズの授業への導入

対象とした授業2つはいずれも、幼稚園教諭及び小学校教諭免許取得のための、いわゆる教職課目である。教職課目の履修は、他者(子ども)との間に、教師と児童生徒といういわゆる教育的関係を職業的に取り結ぶ可能性を意味する。それはややもすると、そのような関係にある職業人になるための技能・技術、情報獲得に問題意識が集中することにもつながる。それによる視野狭窄や人間についての無限であるはずの知恵や知識の恣意的選択に危惧を抱く筆者はあえて、授業の全体を通して、職業的教育関係に回収されないおとな子ども関係とそれを包含しうる社会を提示しようと努めた。良き母、良き教育者、という、多分に社会的枠組みによって生み出されるあり方を求める以上に、同じ時代を生きる、子どもという他者の良き同行者というあり方を模索してほしいとの願いがあった。

2) 絵本の詳細の描き直し

ベルギーの画家・絵本作家であるガブリエル・バンサンによる絵本「くまのアーネストおじさん」は、大きな男のクマのアーネストと小さなネズミの女の子セレスティーヌの日常生活を綴った一連の作品タイトルである。日本では、絵本20冊がいずれもBL出版から翻訳・刊行されており^{iv}、絵本以外に、外伝の

ような絵画集的作品が2冊、170ページに及ぶ厚みのある本として出版されている^v。

① **人物像と関係性** アーネストは公共の広場で掃除夫をしていたときに、公園のごみ箱で、目も開いていない赤ん坊だったセレスティーンを見つけて家に連れて帰り彼女と暮らすに至る。捨てられた子どもを養育するというのは、奇特な志あつてのこととも言い得ようが、アーネストは高邁な志により遺棄された子どもを養育しようとしたのではない。彼は、風采が上がらずうだつもあがらない、世間体や世俗的欲得とは無縁で気負いのない存在として描かれる。このクマのかくのごとき凡庸さがむしろアーネストを愛すべき人物にしている。人を故意に傷つけたり逆に媚びたりおだてたりもしない、すなわち、他者を管理や操作の対象としようと目するようなことはなく、常々誰かのことを心配し、ささやかなことに夢中になったり気持ちを奪われたりする。

二人の住居は時に程よくしばしば過度に、日常使いのモノで散らかっており、そのことによりふたりが、ただ美しいだけの抽象的な物語を生きているのではなく雑然ととりとめもなく広がるある種の“現実味”、具体のある生活を生きていることがわかる。世話をするもの、されるものの逆転もまま起り、年長者であるアーネストが年少者であるセレスティーンの世話になる、あるいは諭されるような場面もまます^{vi}。

② アーネストの生業について

セレスティーンに出会った当時のアーネストは公園の掃除夫であつたし、かつてはホリデイキャンプで働いていたりサーカスのピエロであつたこともあるらしきこと^{vii}が、作品の中で陰に陽に語られる。けれどもふたりで暮らす生活においては、雨漏りを直す必要に迫られて日銭を稼ぐことからして^{viii}、収入は定まらず、たまに実入りがあつても決して充分に多くはない。ある作品の中で^{ix}、具体的に“就職活動”に出向いた時のエピソードが展開するが、求職するも断られ、求職した先の美術館を見ていくことを許可されるや、文字通り絵に心を奪われてしまい、セレスティーンが迷子になったことにすら、セレスティーンがアーネストを自力で見つけるまで気づかない。金が無ければ困るが執心しているとはとても思えず、金の無心をしようとして逆に当てにされてしまうこと^x、一宿一飯の恩を、ほぼ確実に無償で提供するようなこともたびたびである^{xi}。

③ ふたりを取り巻く人々

子どもを育て始めた独り者のアーネストには、最初のうち、隣人の好奇の眼差しが注がれる。アーネストの住む家が、隣人から物理的に見ようとすれば見られる場であることも示唆的であるが、それは脇に置こう。好奇の眼差しはしかし、アーネストの、ただ、捨てた子どもが生を長らえるように、いのちを保てるようにという他意の無い真心の故か、決して否定的でないまなざしへと緩やかに変容し、いわゆる子育てに必要と思しき物品をそつと提供するなど、隣人たちは控え目な協力者、子育ての参与者となる。隣人に限らず、かつての知り合いやふたりに会おう幾人かは、期せずしてふたりのエピソードに巻き込まれ、またそれを共に味わい生きる者となる^{xii}。“困った人”もしばしば登場する。

④ 全編を通底すること

バンサンンの遺作となつた『セレスティーンのおいたち』で、アーネストはセレスティーンの求めに応じ、自分の知りうる限りのセレスティーンのおいたちを語って聞かせることになる。その時がきたのだと、

アーネストも感じている。身振り手振りもつけながら、実際に演じるようにアーネストがセレスティーナに語って聞かせるひと言ひと言は、読み手の胸を打たずにはおかない。また同時に、自らの出生、あるいはアーネストとの出会いについて知ったセレスティーナの、「あなたがわたしを見つけてくれてよかったわ」という言葉に代表される、自らの生への肯定感と他者への信頼に、立場の違い、境遇の違いを超えて安堵し、また共感しうる。

アーネストとセレスティーナのエピソードを描く一連の作品に出会った時、筆者は、愚鈍とさえ映るようなアーネストの実直さ、朴訥さ、人間味（ユーモア）に瞠目した。また、拾われた子どもであるセレスティーナはアーネストの傍らで、自我のしっかりとした、自己主張もし、人の痛みもわかる子どもに育っている。“子どものような”生真面目さと可笑しさ、打算の無さ、無神経とは性質を異にする暢気さ、他者への気遣いのあるアーネストという存在に真に成長した人間の姿を見出す思いがした。また、クマの“成人”とねずみの“子ども”という、見るからに血縁関係にない他者どうしの、家族とも呼び得る関係性を生きる姿から、文化や社会によって規定される価値観の動揺と変容の可能性を垣間見、人の生を、個あるいは個の延長としての家族（近代家族）に帰結し、そのみを正当化しようとする人為を社会的に自明視しないための知見を得られるように思われた。一連の作品を授業において学生たちと2週にわたり読み合いそれぞれに考察したことをもとに、論考をすすめたい。

3. 絵本の読み合い授業実践の考察

1) 第一週授業の振り返りと考察

学生の合計80名のうち、複数名から同じ意見が出された項目については、括弧書きの斜体字で人数を付した。

① 「一冊一冊のエピソードから察せられること」および考察 その1

(表1)

ふたりの様子や暮らしぶりについて
1. 裕福ではない／貧乏、お金が無い (5)
2. ふたりで助け合って暮らしている
3. 意外と現実的な暮らしをしている／夢想的ではない
4. アーネストは結構いろんなことができる (バイオリン、料理、裁縫、キャンプのリーダーなど)
5. 部屋はいつも散らかっている／ふたりとも片付けが苦手、掃除はしない、掃除はきれい、使ったものは出しっぱなしにする／部屋が結構ぐちゃぐちゃで片付いていない
6. アーネストは定職についていない／かつてはサーカスにいたことがある (働いていた?) /何かボランティアをしていた? /ホリデイキャンプで働いていたことがある /時々仕事を探しに行くが、今のところ見つかっていない
7. アーネストはやさしい (8) /寛容、理解がある /アーネストのセレスティーナへの優しさはうらやましいほど。
8. アーネストはあたたかい (7)
9. アーネストはとってもお茶目。

10. アーネストは子どもの気持ち、人の気持ちをよく理解している。
11. アーネストはすごく大人だけど何かを心から楽しんでやるときは子どものよう
12. アーネストは抜けている
13. アーネストはしっかりしている。／どっしり落ち着いている
14. セレスティーンを心配しているが気を遣いすぎているわけではない。
15. お互いによく名前を呼び合う／お互いにとっても心配し合う
16. セレスティーンはわがまま／しっかりもの（料理ができるところ）／意外と気がきく
17. セレスティーンは子どもっぽいときと大人っぽいときがある（2）／とってもませている（3）／アーネストを信頼しきっている／いつでもアーネストと一緒にいたいと思っている。
18. アーネストが子どもっぽく、体の小さいセレスティーンが大人っぽい気がしたが、別の本（エピソード）では逆の感じがした。／アーネストが大人でセレスティーンが子どものように感じたけど、読み進めていくと反対かな？と思いました。
19. セレスティーンはいつもアーネストのを見て生活している、セレスティーンの世界にはいつも必ずアーネストがいるように思った。
20. アーネストはとてもやさしく包み込むようにセレスティーンを論じて、最後には願いを叶えてくれる。
21. 手をつないだりだっこしたり、二人がくっついているシーンが多い。アーネストはセレスティーンに甘い。セレスティーンはアーネストがいないと寂しい。悲しそうにしていたら元気づけようとするし、お互いを大切に思っている。
22. セレスティーンはやきもちやきで心配性。いたずら好き。アーネストもセレスティーンが大好きだけど、セレスティーンよりも表現しないな、と思った。
23. 大人は全員クマで、子どもは全員ネズミ。成長すると、ネズミもクマになるのか？大人子どもの境界に、意味を持たせようとしているのか？

（考察）

学生たちの気づきの多様性や細やかさ、セレスティーンやアーネストへのまなざしに、非常に人間的なニュアンスが感じられる。すなわち、実際の人物に感じるかのように登場人物に生活状況（表1の1, 2, 3, 5）性格への言及（同8, 9, 10, 11, 12, 13, 16, 18, 22）、互いへの気持ち（同14, 15, 17, 19, 20, 21）などさまざまに感じ取り、それを表現しようとするおもしろさである。

作中アーネストはクマでありセレスティーンはネズミであることへの言及もあるが（同23）、学生たちは、その姿に、自らとの連続性や共通性を見る、という暗黙のコードを読み違えることなく、「生きる姿をわたしたちに呈してくれている」ものとして受け止め、我が身に引き受けて感じ考えようとしていることが、上記の感想全体から察せられた。

②「一冊一冊のエピソードから察せられること」および考察 その2

（表2）

ふたりのつながりについて a. 主に関係性の呼称に言及
1. おじとめい（7）
2. おじさんと子ども（元は他人）
3. 親戚同士（5）
4. （ほんとうの）親子（2）

5. 本当の親子ではないが（血のつながった親子ではないが）親子のようなつながり（8）
6. 遠い親戚、おじさんとめいっ子か、もしくは里子かもしれない
7. 本当の親子でも親戚でもなさそう。養子？
8. 血のつながりはないが親子のよう
9. 里親と里子
10. アーネストがセレスティーヌの親の知り合いで、親に頼まれてセレスティーヌを育てている
11. 恋人どうし（3）／彼氏彼女、カップル
12. 夫婦（2）／新婚さん
13. 友だち（9）／大親友、親友、仲のいい友だち、何でも話せる友だち
14. 出会ってすぐに意気投合して一緒に暮らし始めた仲良しどうし
15. 名前は付けられないけど何かしら大切な関係（4）
16. 互いが互いを必要としている関係
17. 何っぽくもない
18. 友だち、家族、恋人、その時々で変わる関係／読み手に任されている関係／ある本では親子だと思っていたが別のを読んだら夫婦に見えてきてわからなくなった。二人の関係は作者の工夫で決まっていなくて、読む人に任せているのではないかと思った。
19. 祖父と孫（2）／親子だと思ったけど、本当の親子ではない気がする。壁を感じるわけではないが、セレスティーヌに対するアーネストの接し方がすごく温かいので。親子だと厳しさが混じると言うから、どちらかというとおじいちゃんと孫に近い気がする。
20. わからない／何冊読んでも何度読んでもわからなかった。でもお互いがお互いにすごく大切な関係ということはわかる

ふたりのつながりについて b. 主に関係性の呼称以外に言及

1. 大人と子どもだけけど「対等」な感じがする。「親子」というより「家族」という感じ？
2. お互いに信頼し合っていて仲がよい。
3. アーネストとセレスティーヌは少し複雑な血縁関係？でも親子ではない？アーネストにどういう過去があるのかセレスティーヌは知らないようなので、最近一緒に住みだしたのではないのでしょうか。二人は恋人のように仲がよく、セレスティーヌはとにかくアーネストのことが大好き
4. はじめは親子かと思ったのですが、アーネストはクマみたいなのにセレスティーヌはネズミのように見えて、よくわからなくなりました。でも、何でも言い合えてかなり親密。年齢は明らかにアーネストが上なので、もしかしたらセレスティーヌが小さい頃に一人でいたところをアーネストに見つけてもらって生活を始めたのかな、と想像しています。
5. 二人はきっと親戚同士かなにかで、他に親しい親族がいないような気がする。
6. 親が普通なら子どもに感じる責任感がアーネストにはないので親子ではないと思った。年齢や互いの呼び方から考えても、血縁者とは考えにくい。
7. アーネストはクマでセレスティーヌはネズミなので、二人は親子でも兄弟でもないと思いました。二人の関係は、家族ではないけど友だち以上なのではないかと思います。人と人との関係も、ほんとうはこの二人のように、「家族」「友だち」「兄弟」「恋人」のように名付けられるものだけではないと思います。きっと二人は一緒にいて心地よいから一緒にいるのだと思います。それでいいんじゃないかと思います。
8. 二人が名前で呼び合っているため、実際親子なのか何なのか、つかめないままでした。ただ、二人の心の距離は親子に近いものがあると思います。親子以上かもしれません。
9. アーネストのたくさんの写真の中にセレスティーヌの写真がなかったので、二人が一緒に暮らすようになったのは最近なのかなと思いました。それでも、親子のような信頼関係がある。
10. 見た目とは違うけど「しっかり者のお姉さんと弱気だけど心優しい弟」という関係に思えた（自分と弟の関係に似ているからかも）

11. 思ったことを自由に言い合える気安さや「ちょっといやだな」と思ってもいつの間にか許せてしまう感じが、家族や親しい人との間に流れる独特の空気感に似ていると思った。
12. 愛情でつながっているとは思いますが、愛情って一括りにできないのだと思います。恋愛感情とか親類間の愛情とか友だち同士の愛情とか。私自身、恋愛対象への愛情も、恋愛的な意味だけでなく、母親のような愛を持っていたり友だちに感じるのに近いものを持っているということに気づきました。
13. 仲は良いけど、寝室は別。夫婦ではなさそう。
14. お金を稼ぎに行ったのに、お互いのために使ってしまうところが可愛いなと思った。
15. セレスティーヌはアーネストが大好きでやきもちを妬いて、時にはお母さんのように接してみたり、でも最終的にはアーネストに甘えている。
16. 迷子になった不安、アーネストに会えて心配した気持ち。子どもの頃によくあったのでよくわかる。

(考察)

シリーズの邦題に「おじさん」という語があるため、それによって喚起されるイメージが多分に誘導されるのではないかと考えていたが、思いの外、多様な推察が出ていた。また、親子やそれに類するものをイメージするような固定した観念が授業者にはあり、またそう答えた者も多かったが(表2-aの1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 19)、「友だち」、あるいは「恋人同士」や「夫婦」という回答も多く(同11, 12, 13, 14)、読み取りの多様性を改めて感じさせられた。呼称以外について言及した中に、「親なら感じる責任を感じていないから親子ではない」(表2-bの6)という意見や「親の厳しさが無い」(表2-aの19)という意見があり、逆に彼女たちの、制約された親子イメージを表して非常に興味深い。また表1での考察同様、登場人物を我が身に引き受けて身近に感じていることがここでも窺われる。(表2-bの10, 11, 12, 16)

③ 「一冊一冊のエピソードから察せられること」および考察 その3

(表3)

年齢についての推察 (アーネスト→E、セレスティーヌ→Cと略)
1. E30代、C4, 5歳
2. C4歳から6歳、Eは最初おじさんかと思ったが子どもなところがあるので、大人っぽい16歳かも。
3. E40代、C5歳
4. セレスティーヌ (以下C) 5歳から10歳、アーネスト (以下E) は成人男性で落ち着いている。
5. Eは30代後半、Cは5, 6歳?
6. Cは小学生くらい、Eは40代から50代くらいか
7. 6歳と35歳
8. Eは中年男性、Cは6, 7歳
9. Cは小学2年生。幼さとませた部分から。
10. E45歳、C7, 8歳
11. Eは定年退職した62歳から65歳くらいの人。Cはまだ幼いと思ったが、料理ができるので7歳から11歳程度
12. Eは30代後半から40代前半、Cは10歳前後
13. Eは45から47歳くらいでCは11歳

14. Cは小学校高学年くらいでEは40歳から50歳
15. Eは30歳から40歳、Cは8から15歳
16. 思春期を過ぎた娘とパパ
17. Eは53歳くらい、Cは16歳
18. セレスティーンは、小さく見えるけど、行動や言動がとてもよくわかるので、私たちと変わらないくらいなのではないか (18、19歳)
19. E45歳、C30歳
20. Eは結構いい年。Cは小さい。
21. ふたりとも23歳から25歳
22. E高齢、C幼い
23. E30、Cは8歳か20代

(考察)

推察された年齢が、幅が広いのみならず多様であることに驚く。筆者は中年と幼児(表3の3, 5, 20, 22)という以外に考えようがあることすら思い及ばなかったが、それは相当に型にはまった見方であり、学生たちの発想には、思いのほか自由さが感じられた(上記以外)。

しかしその一方で、「小さな(幼い)女の子と思っていたが、料理をするなどの行動や言動から、(見かけよりも)年齢が高いと思った」というような回答など(同11, 12)、セレスティーンの年齢を高く見積もった者も少なからず居た(同16, 17, 18, 21, 23)。たとえば幼い子どもが刃物や火を使っていわゆる料理をする文化も特に例外的でなく存在し、あるいは時代を遡れば当たり前前の姿としてあったはずであるが、学生に限らず、自らのその枠に閉じ込められるところの時代や文化に規定的な見識は^v、文化の多様性や他文化の存在、時代性に対し、繊細になりにくい。今回の学生による推察からも改めて感じさせられた。

2) 第二週授業の振り返りと考察

まず、学生たちに、前週の授業の振り返りとして書かれたコメントをまとめたレジュメを配布した。それを読んだ後で、詩画集のような趣きの『セレスティーン アーネストとの出会い』の画像をプロジェクタ投影し、スクリーンで映画のようにして見た。画像はあらかじめ120ページに及ぶすべてのページを1ページごとにスキャンして取り込んでおいた。それをスライドショー化し、文章については授業者が、映し出されるページに合わせて読んで聞かせた。その後、絵本作品である『セレスティーンのおいたち』を1ページ1ページ丁寧にページを繰って絵を見せながら、やはり授業者が読み語った。それから前回同様、各自提出用紙に、今回改めて感じたことなどを記入し、授業を終了。提出用紙に書かれたことを以下に掲げる。

(表 4)

ふたりのつながりについてなど改めて感じたこと
1. アーネストがセレスティーヌを授かった時、子どもが産まれたようにうれしかったんだろう。まだ目があかないくらい小さなうちから育てて来たので、アーネストにはセレスティーヌがほんとうにかわいいのだろう。
2. 二人は、間違いなく家族なのだと思う。(6)
3. 家族というのは血のつながりではないんだと思った。(11)
4. 今日の2冊の本から、二人がますます本当の親子のように見えてきた。二人には、家族のようなつながり、深いきずなががあるのだと思った。
5. 自分もアーネストのような親になりたいと思った。
6. ごみ箱に捨てられていたのは、ほんとうに悲しいことだと思ったが、セレスティーヌにとってはアーネストに見つけてもらったことがこの世に生まれてきたことと同じことなのだと思う。
7. ごみ箱に捨てた親を許せないと思った。でも、捨てられたからアーネストに出会えて、そこがセレスティーヌの一生の始まりになり、アーネストもセレスティーヌに出会った時の話を聞かせながら、そう思ったんだと思う。
8. 親になる人、保育者になる人みんながこの本を読むといいと思った。
9. 現実の大人に、アーネストを見習ってほしい。
10. 読者である私たちにも、セレスティーヌとアーネストの出会いやセレスティーヌのおいたちを、伝えてもらえてうれしかった。／セレスティーヌのおいたちを、絵本を読むという形でだけどアーネストの口から聞かせてもらえて、とってもすっきりした。そのうえで、やはり、二人の間には、実の親子以上のつながりがあるのだと前よりも強く感じた。
11. おなかを痛めた子、という表現があるけど、おなかを痛めることは、実の子どものように愛せるためのどうしても条件というわけではないような気がする。おなかを痛めていなくても、実の子どものように愛することができるんだ、と、あたたかい気持ちになりました。
12. セレスティーヌはアーネストを本当に信頼していたから、ごみ箱で拾われた話を動揺しないで聞くことができたのだと思います。そしてきっとこれからも(ますます?)、ふたりは仲良く暮らしていくと思います。わたしも、アーネストがセレスティーヌを見つけてくれてほんとうによかったと思いました。
13. 子どもはこの本を読んでもらって、セレスティーヌに自分を重ねて、お父さんやお母さんの優しさを感じるのかな、と思った。
14. 自分が誰かに大切にされているっていうことが大切なんだと思う。それは、そして、だいたいはお父さんやお母さんだけ、そうじゃなくてもいい、っていうか、そうじゃない場合もあるんだと思った。
15. 誰にでも、自分を大切に思ってくれる人が必要で、今までは、それは血のつながった親だと思っていたけど、血のつながりじゃないということがわかった。
16. おかしな言い方ですが、アーネストに母性を感じました／アーネストは男の人だけお母さんみたいだと思いました。
17. 包み込むようにあんなにだっこしているのだから、アーネストとセレスティーヌは家族です。
18. クマのアーネストは、ふわふわしていて背中が丸くて、ちょうど赤ちゃんを抱く形になっているなと思った。
19. 今日みんなの(先週の)意見を読むまで、アーネストがクマでセレスティーヌがネズミであるということに気がつかなかった。完全に人として見て(読んで)いました。

(考察)

絵本では、セレスティーヌがごみ箱に捨てられて以降のこののみが語られているが、それでも、捨てた親を嫌悪する気持ちを表現した学生があった(表4の6,7)。これはそう書いた学生に限らず人の情として当然の感情かもしれない。ただ、何人もの学生が、アーネストとセレスティーヌの出会いがセレス

ティーンの人生の始まりであると感じているようだった（同1, 6, 7）。

作品中、大人はすべてクマ、子どもはすべてネズミであることに言及した学生があったが（表1の2, 3、表4の18）、それは多分に示唆的であり、おとな子どもの分化をのみ意味しているのではないと思われる。作中、いわゆる血のつながりのある親子か否かの別はなく、大人はクマ、子どもはネズミである。すなわち、親子であってもとりたてて似ているわけではなく、むしろ子どもは他の子どもたちととてもよく似ており、大人は他の大人たちととてもよく似ている。クマとクマ、ネズミとネズミであるから当然であるが、それは、人が生殖を超えて、自らの世代性を持って次世代に文化や社会を受け継いでいくことの示唆でもありうるのではないか。「アーネストは、ふわふわしていて背中が丸く、赤ちゃんを抱く形になっていると思った」と書いた学生がいたが（表4の17）、それは、抱く姿をしている者、論考してきたところの「大人」は、それが男性であれ女性であれ、あるいは肉親であれ非血縁者であれ、「子ども」への養護性養育性をときに無自覚に持ち、時代の同行者となって共に生きるもの足ると捉えられ得ることを示すのではないか。

筆者にとって非常に見知ったものである大人と子どものつながり、すなわち、保育者と子どものつながりにおいて、からだとからだの距離やおかれ方、あり方といったいわゆる身体論的なことが、保育という営為にとって見落としがたい肝要なこととしてあることに、改めて思いが至る。人は、決してからだなくして生きることはできない。それはきわめて当たり前のことであるが、人が人と生きるということ、あるいは保育という営みにおいて、意味的に何もひねらずにからだが「このようにあること」、あるいは「居る」ということが果たすことの大きさは、存外論考されてきていない。非常に素朴なからだの「ありかた」として「傍らにいる（近くにいる、そばにいる）」、あるいは「受け止める」「抱きしめる」ということは、性質的に理論化を拒むものであるのか、保育の理論化の枠外にあり続けているように思われる。子どもと共にある、人とともにある、ということは、日常実践としての保育の大事な部分を構成しているのかもしれないにもかかわらず、方法論的なあるいは内容論的な「受容」や「肯定的理解」「傾聴」等という括弧で括られた作り込まれた概念としてはあるが、それらはいずれも、「ありよう」「ありかた」そのものとしての姿からは確実に乖離する。

3) 血縁や教育的関係に特化されない保育的つながりを見いだす

日常の事象が、語りを通して他者へ向けて開かれていく。それは、たとえば実際の保育の中での事象にとどまらず、絵を伴いことばを伴った絵本という媒体を通しても言いうるのであろうと考えた。自分の見方（読み方）を語りまた他者の見方（読み方）にも耳を傾けることによって、同じ場面を同時に見ることではないとしても、自分自身の見方に安住するのではなく、見方そのものを各自が吟味する方向性がここに生まれる。保育の世界を生きる子どもと大人とに対しては、そこに主体として生きる子どもと大人に寄り添う気持ちを養い続けてほしい。自らの価値基準や概念的枠組みを取りはらって保育の事象をありのままに感じとり、その中から保育の真実をつかんでいくことができるよう、研究を相対化し、相対化したことを蓄積していくような保育研究のありかたを、今後も模索していきたい。

先の論考でも触れた通り、保育においては、保育者と子ども、育つものと育てるもの、あるいは発達したものと未発達なもの等、いかなる二項対立的思考もあてはめることが難しい。むしろそれらは両義的同時性を持ちつつ展開しうる。二項対立的に捉えるのではない見方とは、補完的にかつ融合的に起こりうる

ことである。家族のあり方やその良し悪しを既成の枠組みで自明視せず、「決め付け過ぎない」「言い切らない」かつ「自己否定し過ぎない」中で、にもかかわらず他者と共にある生を生き続けようとし、希望を持ち続けることを可能にする。保育研究は、そのような知の在り方への希求性に支えられて成り立つものであると、今回の授業における絵本の読み合いでの、学生の逡巡する姿から改めて感じた。

4. 小括

バンサンの遺作となった絵本『セレスティーンのおいたち』中、アーネストはセレスティーンの求めに応じ、またアーネスト自身の、その時が来た、という感覚によって、自ら知りうる限りのセレスティーンのおいたちについて、状況を再現し語って聞かせる。アーネストのひと言ひと言は、平易であるが重厚で、読み手の胸を打たずにはおかない。また、自らのおいたちを知ったセレスティーンの、自らの生への肯定感に、立場の違い、境遇の違いを超えて安堵しまた共鳴する。

同時に、遺棄されたものとそれを拾って育てるものとのつながりは、社会的強者による論理で語りえず、いかんともしがたく「あたりまえに弱くあること」への共鳴から理解される。弱きもの、小さきものへの共感や肯定感無しに語ることでできない領域として保育研究を捉え、保育とは弱きもの、小さきものとともに構成される社会の、今と未来を生きる覚悟と共にあると筆者は考える。そしてアーネストとセレスティーンとは、「保育的なつながり」を生きている、と捉える。

弱さや小ささを、ただ克服され、強さや大きさへと変容させるべきものとして捉えるあり方やかわりを仮に教育や啓蒙の名で呼ぶならば、ここに展開しようとした保育論は、教育や啓蒙であるよりも、人どうしのあり方を探る、ケア論的なものである。より良きものへ、より良き生へ、という目標以前に、子どもは（人は）今このときの確かさを糧として、もっと高みをもまた小ささをも捉えられる自分へ、豊かに重なった時を経た自分へ、と自ずから変容せずにはおれないものである。保育とはまさに、字義にあって育ちを保つ営みであり、育とうとするものが、育つそのままを保たれるよう祈る思いが保育の思いではあるまいか。

子どもの生きる生、人により生きられる生とは、この世に生まれ出たその瞬間からの過去を、短くとも長くとも消去することもできずに今につながり、未来へとつながる。そして、その存在（あるいは存在感）は、他者とのかわりの中で内的に強まる。外からの操作で減じたり足されたりされる類の変容ではなく、つながりそのものの中で、内的に変容しつながりに還元されていく。変容しつつも人は、死のときまで未熟なもの、弱きものであり続け、それゆえ弱さに共感し、いつくしみうる。

より良きもの、強きものへの変容を目指されるだけの人の育ちで抜け落ちることをも、生きられたさながらに包含する保育的なつながりにおいては、たとえば痛みを、通過儀礼的に「なにかに向かう途上のこととして（仕方なく）ある」のではないそのままとして、良いも悪いもなく受け止める。そして、自分の荷物として背負いながらしか生きて行けない、そういう恥ずかしさや負い目、痛みにしながらの生である。

アーネストの「語り」とセレスティーンの「聴くこと」のセットであるところの「表現」は、痛みのただ中にあるが、それはひと肌の、人間的な可笑しみのある温かな痛みであり同時に互いにかかわり合い作用し合うことによって未来への希望たりうる。教職授業において、アーネストとセレスティーンに導かれながら、血縁による家族的つながりや教育的つながりでない「共にあるということ」すなわち保育的なつながりへの気づきを得、自らの思考やその方法、枠組みを自明視しない学びによる知見を得た。本論にお

いて、絵本を通して保育の知に至る可能性の提示と、また、社会が「子を授かり」「育てる」ことにおける生殖的出産や近代家族的な独尊性のささやかな問い直しが、できたのではないかと考える。

注

i. シリーズの原題は、Ernest et Célestine

画家であり絵本作家であるガブリエル・バンサン Gabrielle Vincent (1928.9.9~2000.9.24) による。ガブリエル・バンサンは絵本執筆時のペンネームであり、バンサンの本名はモニック・マルタン Monique Martinで、画家としての名前も同様。

ii. 塩崎美穂・菊地知子 (2010) 『日常性から離れない保育学にむけて—「系統的保育案」から「対話的保育カリキュラム」へ— お茶の水女子大学人文科学研究第6巻 など

iii. イクメンプロジェクトホームページによれば、イクメンとは、「子育てを楽しみ、自分自身も成長する男性のこと」であるという。

http://www.ikumen-proiect.jp/project_about.html

iv. くまのアーネストおじさんシリーズの作品年譜は以下の通り

今江祥智他 (2004) 『絵本作家ガブリエル・バンサン』BL出版による

Gabrielle Vincent (1981) Ernest et Célestine ont perdu Simeon, Duculot もりひさし訳 (1983)

『くまのアーネストおじさん かえってきたおにんぎょう』BL出版

Gabrielle Vincent (1981) Ernest et Célestine musiciensdes rues, Duculot もりひさし訳 (1983)

『くまのアーネストおじさん ふたりはまちのおんがくか』BL出版

Gabrielle Vincent (1981) Ernest et Célestine vont pique-niquer, Duculot, もりひさし訳 (1983)

『くまのアーネストおじさん あめのひのピクニック』BL出版

Gabrielle Vincent (1982) Ernest et Célestine chez le photographe, Duculot もりひさし訳

(1983) 『くまのアーネストおじさん ふたりでしゃしんを』BL出版

Gabrielle Vincent (1982) Ernest et Célestine. Le Patchwork, Duculot (未邦訳)

Gabrielle Vincent (1982) Ernest et Célestine. Le Tasse cassee, Duculot (未邦訳)

Gabrielle Vincent (1983) Noel chez Ernest, Duculot もりひさし訳 (1983) 『くまのアーネスト

おじさん セレスティーンのクリスマス』BL出版

Gabrielle Vincent (1984) Ernest et Célestine. Rata plan plan plan, Duculot (未邦訳)

Gabrielle Vincent (1984) Ernest et Célestine. La grande peur, Duculot (未邦訳)

Gabrielle Vincent (1985) Ernest et Célestine au muse, Duculot もりひさし訳 (1985) 『くま

のアーネストおじさん まいごになったセレスティーン』BL出版

Gabrielle Vincent (1985) Ernest et Célestine. La tanté' Amerique, Duculot もりひさし訳

(1985) 『くまのアーネストおじさん ふたりのおきゃくさま』BL出版

Gabrielle Vincent (1987) La naissance de Célestine, Duculot もりひさし訳 (1988) 『セレス

ティーン アーネストとの出会い』BL出版

Gabrielle Vincent (1987) Ernest et Célestine. Earnest est malade, Duculot もりひさし訳

(1988) 『くまのアーネストおじさん びょうきになったアーネスト』BL出版

Gabrielle Vincent (1987) Ernest et Célestine. La chamber de Josephine, Duculot もりひさ

- し訳 (1988) 『くまのアーネストおじさん ふたりのインテリア』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1988) Ernest et Célestine au cirque, Duculot もりひさし訳 (1989) 『くまのアーネストおじさん サーカスがやってきた』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1990) Ernest et Célestine...et nous, Duculot もりひさし訳 (1991) 『くまのアーネストおじさん アントワーンからのてがみ』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1992) Ernest et Célestine au jour le jour, Duculot もりひさし訳 (1993) 『くまのアーネストおじさん セレスティーヌとプラム』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1994) Ernest et Célestine. La chaute d'Ernest, Duculot もりひさし訳 (1995) 『くまのアーネストおじさん アーネストがころんだ』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1995) Cet été-la, Casterman もりひさし訳 (1995) 『あの夏』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1998) Ernest et Célestine. Le labyrinthe, Casterman もりひさし訳 (1999) 『くまのアーネストおじさん ふたりでめいろへ』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1998) Ernest et Célestine. Une chanson, Casterman もりひさし訳 (1999) 『くまのアーネストおじさん とおいひのうた』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1999) Ernest et Célestine. Une caprice de Célestine, Casterman もりひさし訳 (2000) 『くまのアーネストおじさん セレスティーヌのきまぐれ』 BL出版
- Gabrielle Vincent (1999) Ernest et Célestine. La cabane, Casterman もりひさし訳 (2002) 『くまのアーネストおじさん セレスティーヌのこや』 BL出版
- Gabrielle Vincent (2000) Ernest et Célestine. Ontdes poux, Casterman もりひさし訳 (2002) 『くまのアーネストおじさん ボレロがやってきた』 BL出版
- Gabrielle Vincent (2001) Ernest et Célestine. Les questions de Célestine, Casterman もりひさし訳 (2003) 『くまのアーネストおじさん セレスティーヌのおいたち』 BL出版
- v. 上記年譜中の『セレスティーヌ アーネストとの出会い』、『あの夏』の2冊
- vi. 註iv中『びょうきになったアーネスト』や『アーネストがころんだ』におけるセレスティーヌの甲斐甲斐しさと、アーネストが諸種のありきたりなダメージにたやすく弱る姿の対比は、おとな子ども関係の逆転や混乱といったある種のリアリティを伴い興味深い。
- vii. 註iv中の『ふたりでしゃしんを』『サーカスがやってきた』
- viii. 註iv中の『ふたりはまちのおんがくか』『セレスティーヌとプラム』
- ix. 註iv中の『まいごになったセレスティーヌ』
- x. 註iv中の『ふたりのおきやくさま』
- xi. 註iv中の『ボレロがやってきた』『セレスティーヌのこや』
- xii. 註iv中の『あめのひのピクニック』『あの夏』

(参考文献)

- 今江祥智、BL出版編集部編 (2004) 『絵本作家ガブリエル・バンサン』 BL出版
- ジェイミー・リー・カーティス、ローラ・コーネル (1998) 『ねえねえ、もういちどききたいなわたしがうまれたよのこと』 坂上香訳 偕成社
- やしまたろう (1981) 『あまがさ』 福音館

- いとうひろし (1995) 『だいじょうぶだいじょうぶ』 講談社
- 上笙一郎 (1991) 『日本子育て物語 育児の社会史』 筑摩書房、
- バーバラ・ロゴフ (2006) 『文化的営みとしての発達 個人、世代、コミュニティ』 當眞千賀子訳 新曜社
- 今江祥智 (1996) 『幸福の擁護』 みすず出版
- ミシェル・ヴィヴィオルカ (2009) 『差異 アイデンティティと文化の政治学』 宮島喬、森千香子訳 法政大学出版局
- 竹内敏晴 (2009) 『「出会う」ということ』 藤原書店